有根

書道研究
有根会 本部
〒496-0812
愛知県津島市兼平町1-92-1
TEL・FAX 0567-69-6925
発行　編集部

会長
松下 英風

第四十六回有根会書展、一週間とプラス一日、一日長かったですが、当番等皆さんのお蔭で大盛況のうちに終えることができ感謝致しております。協賛企業の方々、ご協力有難うございました。これからも宜しくお願い申し上げます。

今回もご招待致しました中華料理龍園店長後藤義和さん、義和さんのお父さんと、私の父松下芝堂が、仲が良く、色々とお酒を飲みながら、様々な事を語っていたようです。中華料理だけでなく、他に隠れた力を持っておられ、大変にお世話になっております。父共共、今度は息子同士仲良くやっていきたいと思っています。宣伝になりますが中華料理龍園も宜しくお願い致します。

今年、一年のはじまり、近くの津島神社へ参拝に行きました。私もう前厄なんです。かぞえで六十才、自分の事で恐縮ですが、以前は、もう五十才過ぎなのかと思っていましたら、すでに六十才に手が届きます。時の流れの速さを感じます。

東京へよく出かけますが、東京へ行きますと書道界の流れが解ります。書道界もどんどん変わりつつあります。私も、重々承知しながら変わっていきたいと思っています。有根会も、その流れを見ながら、仲良く進んで行きたいと思いますので、よろしくお願いします。

今回、三神先生は懇親会を欠席されました。皆さんは、どうかされたかと思ってみえますが、お元気です。展覧会場へ文化センターの生徒さんを連れて見に来て下さいました。本人は少し足が弱くなったと、おっしゃってみえましたが、しっかりと歩いてみえました。ご安心ください。亀山先生もお元気で、会のために良く尽くしていただき、また出席して下さることが、本当に心強く思っています。亀畑先生も遠くから深夜バスで何時間もかけて、有根会のためにかけつけて頂き、感謝致しております。

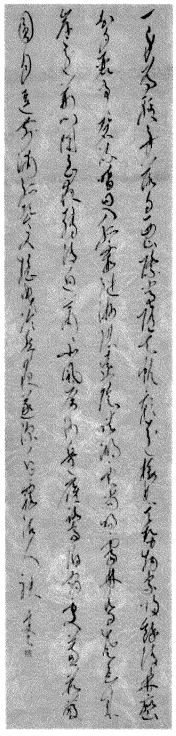
有根会会期中、毎日会場に詰めて、何度も何度も作品を眺めていて、思った事は、有根会は翠軒流を基に父より引き継いだものだと思いました。これからは淡墨でお願いしたいです。興文会とは、ちがいます。興文会は全国に向けて発信する会なので色々な事をためしています。有根会は、父松下芝堂の会として、翠軒流を基に淡墨で、進んでいきたいと思います。

来年は淡墨の良い色を出し、作品も、その色に負けないように精進して、出品してください。

受付でチケットを配布しました。無駄にしないように、行けない時は、誰かにお願いして下さい。

これからも皆さんの力を結集して、会を盛り上げていきましょう。

改組 新 第2回日展（2015）　和張尹憶東籬菊　松下英風



改組 新 第2回日展（2015）　常建の詩　古川昇史

有根会役員

常任顧問　三神榮軒　亀山富美

会長　松下英風

副会長　加藤矢舟　古川昇史

理事長　古川芝芳

副理事長　天見芳泉　亀畑明曠　永谷恵子　本間翠眉

常任理事　秋田桃泉　落合玉泉　庄田翠苑　杉浦仁美　畑裕子　林翠葉　日景洋子　藤井正香　藤村真徳　松下三雪

監事　黒野芝香　中尾芝菜

理事　伊藤芝山　大野昭子　岡田愛子　奥村春翠　勝野紅雪　加藤華泉　加藤香雪　加藤翠林　川松杷泉　木戸長山　小林雅子　遠山翔雅　橋口たず子　夏目美沙　西川佳江　古川侃司　堀田廣泉　村上雪山　山田千鶴　渡部春泉　加藤翠谷　小宮山可恵

参与

平成二十八年三月現在

第四十六回有根会書展

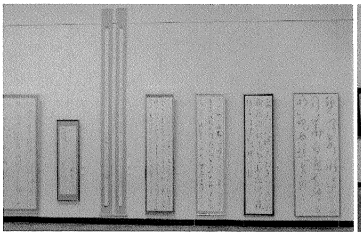
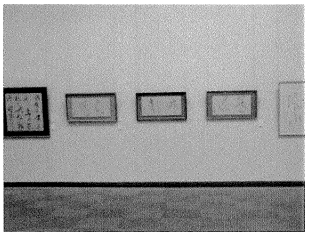
常任理事　松下三雪

第四十六回有根会書展、第三十二回公募展は一月五日から十一日まで、愛知県美術館ギャラリーＥＦ室で開催されました。

会場に入ると、すぐ目にはいってくるのは、半切半横の作品が三つ。前会長松下芝堂先生の「圓轉」、常任顧問三神先生の「還源」、会長松下英風先生の「数寄」である。淡墨の文字の美しい流れ、そして勢い、極めつけは、落款の位置。まるでシンクロしているかのように同じ場所。愛知県美術館ギャラリーの天井の高さという空間を贅沢に使った展示となりました。

会員展も公募展も昨年よりも多くの出品数となり、入場者も、年始早々にもかかわらず、一六〇〇名を超える賑わいとなりました。今年も愛知県芸術センター樋口センター長、日比津島市長、武藤教育長、そして、大勢の中部日本書道会の役員及び、諸先生方にお越しいただきました。

マリオットアソシアでの表彰式及び懇親会は、松下英風会長の「これからは有根会書展の作品は淡墨で！」というこれからの指針を胸に刻み、最高に美味なお料理に舌鼓をうちました。

公募　特選

中日賞

芝堂準大賞

芝堂大賞

公募　東海テレビ賞

公募　中日賞

東海テレビ賞

公募　入選

公募　秀作

謝辞

この度は、第四十六回有根会書展におきまして、身に余る賞を頂き、誠にありがとうございます。これもひとえに、松下英風会長をはじめ、会の諸先生方のおかげと感謝申し上げます。また師匠古川昇史先生には、日頃より、温かく熱心なご指導をいただき深く感謝しております。

今回の作品は、見ていただくだけでも、首が痛くなるような、上部分はかすんでしまうような、そんなただただ細長い作品で、皆様にはご迷惑をおかけしたことと思いますが、私自身、作品を書くにあたりまして、淡々とした静かな、とてもいい時間を得ることができました。

先生の教室でのお稽古では、なかなか思うように筆が運ばず、苦しいことの方が多いのですが、となりで一緒に苦戦している書友達がいてくれると思うと、私にとって大切でありがたく、かけがえのないものだなあと、つくづく実感いたします。今後も、楽しみながら、精進して参りますので、ご指導、ご支援いただきます様宜しくお願いいたします。

入賞者を代表いたしまして御礼申し上げます。

平成二十八年一月十一日

入賞者代表　杉浦仁美

第四十六回有根会書展入賞者

芝堂大賞　杉浦仁美

芝堂準大賞　岡田愛子　小林雅子　渡部春泉

中日賞　伊藤祥子　倉知葉舟　余合美花

東海テレビ賞　稲吉邦子　中村智恵子　鷲野春翠

第三十一回公募展入賞者

中日賞　藤浪淑子　柳沢孝子　山田祥子

東海テレビ賞　河合要　安藤桃舟　柄澤信一

特選　高見芝萌

秀作　中尾美恵子　美濃部純　豊田日出子　福井三枝子　寺林絹代　磯村香月　前田恵風　加藤多恵子　神谷惠舟　高須擧舟　橋本瑞舟　柳川キソ子　桃田美友紀　大林靖奈

桐山大輝　岩田純子　伊藤秋月　川崎澄子

仙頭春暁　松山柏葉

大野彩　原科智子

真鍋美千　市岡直子　川瀬智香　清水華香　山中敬子　渡部郁子　野田綾子　野崎桜花　梅村美文　村上和子　中川郁子　壁谷由美　大場早苗

第三回書初め公募展を終えて

副理事長　本間翠眉

平成二十八年一月五日～十一日、愛知県美術館ギャラリー八階EF室通路壁での展示。先回より若干減りましたが、松下英風会長はじめ当番審査の先生方による厳正な審査の結果、力強い優秀作品一七五点が飾られました。

表彰式は十日愛知県芸術文化センター十二階アートスペースA室にて、大勢のご父兄の方にもご出席を頂き大いに盛り上がり、和やかなうちに無事終了いたしました。

今回、はじめて出品者全員に参加賞として特注文字入り鉛筆（書道研究有根会書初め公募展）二本セットを差しあげました所「あの参加賞良かったと思う」と嬉しい声を聞くことが出来ました。

最後になりましたが、菊屋商店様、丸和様、協賛企業様（八社）、そして各先生方、有根会の皆々様のご協力の賜物と心より厚く御礼申し上げます。

第三回書初め公募展受賞者

会長賞
伊藤晴香　濃野さくら
山本昇之介　渡辺康太郎
正好唯華

愛知県知事賞
伊藤志希那

名古屋市長賞
安藤なつみ　村上英美利

津島市長賞
池田朱里　高津菜子
川合　奏　太田千晴
西村仁亜

豊田市長賞
鷲野眞歩　井上麻妃瑠
矢野ほの花　鈴木麻由
菅原美緒

愛知県議会議長賞
稲本清花

名古屋市議会議長賞
外山あかり　津田昂汰

津島市議会議長賞
白井菜々美　鈴木ひとみ
水木晴香

豊田市議会議長賞
石川諒一　青木映美里
才塚俊吾

大賞
青木裕佳子　朝日由佳
市川乃愛　宇田川琴未
岸　馨子　後藤優月
澤崎秋香　平田和也
村井萌華　天野綾美
齋藤さくら　矢尾ののか
西　春音　福舛莉子

愛知県教育委員会賞
松井透衣　鈴木結菜
貝沼心咲
水谷愛美

名古屋市教育委員会賞
佐藤雪乃　米田晟杏
徳永華佳　兼行伶奈
佐藤亜美

津島市教育委員会賞
横井夢香　水谷夏希
泉　佳奈

豊田市教育委員会賞
山田珠貴人　小田彩衣里
本間琉聖

中日新聞社賞
武井志歩　金子遥香
鳥居里美　若山舜太
渡辺文也

東海テレビ賞
澤　拓摩　天野里美
臼田和貴　鬼頭梨子
長谷川みい奈

準大賞
岸　香歩　寺田知空
濃野みらい　新見羽琉
山田有実　浅井星流
阿南果純　佐藤友香
佐野天音　山口涼夏
二階堂将　向井ありさ
河合咲奈　平岡穂乃花
神野紗希　藤井貴大
米倉実希

有根会賞
蟹あかり　黒野香織
村瀬優心　加藤碧
川口孝太郎　新見光琉
宮田香乃　大上楽々
山口暖心　青山智哉
朝日香名　足立夢子
江村美羽　酒井あゆみ
竹田璃功　竹本ななみ
立岩心華　中野日菜
原戸紗奈　堀田萌加
水谷昇太　吉田愛望
中村友彌　青木稔幸
沓名唯花　瀧晴加
篠田丈　林和音
飯谷朋子　大井愛菜
桜田このみ　早川凌矢
古田一天　大谷奈那

優秀賞
四十点
十八点

奨励賞

研修旅行

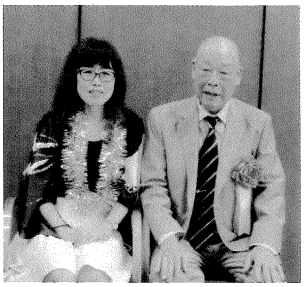
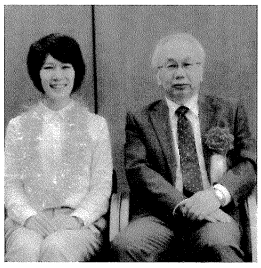
平成二十七年六月十四日(日)第二回有根会研修旅行を開催。

初めに形原にある補陀寺にて、初代会長松下芝堂先生が書かれた「補陀寺の沿革碑」を拝見し、碑の前で集合写真を撮り、色鮮やかな紫陽花を鑑賞しながら散策しました。ホテル竹島で、海の幸の美味しいお料理に舌鼓し、楽しく歓談しました。その後、ラグーナテンボスに立ち寄りお土産等を買い、最後に伝統工芸「榊原毛筆」へ、私達が使っている筆が、どのような原料から、どのように作られていくのか、筆作りの工程の説明を聞き、作業の様子を、間近で見学させていただき職人さん達の手捌きに感動し、良い勉強になりました。会員相互の親睦も深まり、楽しく有意義な研修旅行となりました。

読売入賞入選有根祝賀会

平成二十七年十月十一日(日)
中華料理「龍園」

第三十二回読売書法展の当番審査員・松下英風会長先生のおかげで、多くの入賞入選者を輩出しました。サプライズで、亀山富美先生へ会長からのステキなプレゼント贈呈があり、会も盛り上がり、美味しい料理に舌鼓し、和やかで楽しい祝賀会となりました。

書展入賞者

◇改組新第二回日展
入選　松下英風　古川昇史

◇第三十二回読売書法展
読売俊英賞　杉浦仁美　岡田愛子
特選　奥村春翠　木戸長山　遠山裕子　夏目美沙　冨田春風
秀逸　大岡祥園　清水裕子
会友　岡島暁雲　長船志保　遠山翔雅　中根翠栄　古川加奈子
入選　伊藤信子　安藤聡美　内山雅舟　壁谷由美　佐藤緑山　竹下三七子　中村智恵子　柳澤孝子　鷲野春翠　古川泰子　大野彩　伊藤柳川　粕谷芳翠　近藤彩月　竹内聡美　柘植真浪　藤井秀堂　余合寿風　加藤香雪　渡辺郁子

◇第六十五回中日書道展
準大賞　松下三雪
桜花賞　岡田愛子

◇第六十八回瀬戸市美術展
美術展大賞　岡田愛子

良寛の里を訪ねる旅

副会長　加藤矢舟

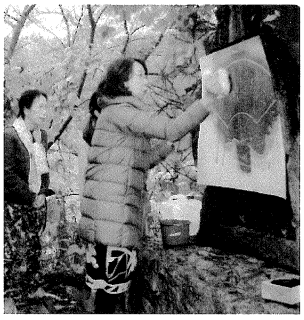
十月三十一日(土)～十一月一日(日)一泊二日で良寛様の真筆が見られるツアーとして、雙根会主催で実施しました。豊田地区と一宮地区との合同で、三十八名の参加がありました。豊田地区からは豊田書道連盟会長の鈴木公平氏、有根会会長の松下英風先生ご夫妻も参加していただくなど関心の高さを感じました。また、一宮地区からは良寛研究に造詣の深い武山翠屋先生に見学コースの講師も兼ねていただくなど、ご尽力いただきました。

初日は、良寛の里美術館と木村家を訪問しました。特に木村家では当主の木村元蔵氏から家宝である良寛様の六曲屏風を中心に分かりやすく解説していただきながら真筆を目の当たりに見ることができ感激しました。中でも良寛様が愛されたお菓子「白雪糕」を題材にした手紙文に深い感銘を覚えました。

岩室温泉「ほてる大橋」に宿泊し、早朝より有志にて拓本づくりに挑戦しました。宿泊地近くに良寛様が書かれた「田中の松」の碑があり、武山先生のご指導で拓本づくりを実際に体験することができとても良かったです。

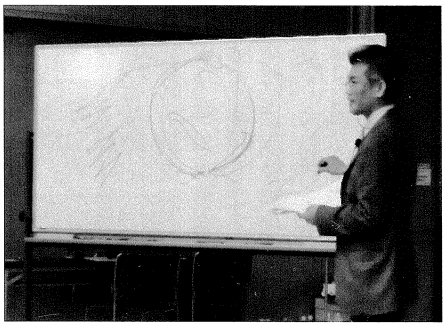
次に五合庵、乙子神社草庵、分水良寛資料館を見学し、最後に良寛様ゆかりの和菓子店「大黒屋」を訪れ、白雪糕などをお土産として購入しました。

二日間充実した良寛ツアーを終え、主催者として一番嬉しかったことは、参加者の皆さんから「良寛様の真筆が見られ、とても良かったです。」との感想を聞けたことです。機会があれば、再度訪れてみたいと思います。



中部日本書道会 第十九回書の魅力公開講座

十一月二十二日(日)電気文化会館五階イベントホールにおいて開催され、多くの方々が参加されました。「和様・淡墨の書」と題し理事松下英風先生がご講演され、用筆法・頭の中でイメージを描くこと・技法等多岐にわたり、お話しされ解りやすく大変有意義な講座となり好評でした。



「和様・淡墨の書」

松下　英風

1．和様と唐様の違い

唐様は、一般的に中国の書であり、中国の書を継承していることであります。漢詩をつくることが出来ることが前提で、それなりの教養を身につけていることであります。中国の書を日本に広めた三筆は、空海(弘法大師)・橘逸勢・少し後になりますが嵯峨天皇です。

和様は、中国の書を取り入れ、日本人として根底に流れる美意識が働き、無意識のうちに和様化したのではないかと思われます。和様を発展させ、和様の書を完成したとされている三跡は、小野道風(おののみちかぜ)・藤原佐理(ふじわらすけまさ)・藤原行成(ふじわらのゆきなり)であります。

2．淡墨について

淡墨、ようは薄墨のことです。墨を薄めて使いますが、墨には、松煙墨や油煙墨とがあり、おもに松煙墨を使います。青墨とも言いますが、茶墨もあります。その墨の一番綺麗な墨色を使います。墨が古いほど、良い色が出ます。書いて頂くと分かりますが、筆で十字を書くと交差したスジが見えます。どちらが、先に書いたか分かりますし、書き直したことも分かりますので、失敗できません。淡墨は、そういう怖さもあります。

3．翠軒流について

淡墨と言えば翠軒流と、みなさんは認識していると思います。他にもありますが。しかし、昔よりは、ずいぶん濃くなりました。父から頂いた、直径12㎝ほどの六角形の松煙墨ですが、一生使えると思っていましたが、今では五分の一ほどしか残っていません。かなしくなります。

翠軒流はおもに草書体でしょうか。草書がおもですが、行草体もあります。流暢で、円を中心とした作品だと思います。女性的とも言えます。

私は翠軒流とはいえ、翠軒先生は知りません。その弟子である父、松下芝堂から学びました。けっこう、さぼっていましたが…。翠軒流よりは芝堂流と言った方が私はシックリときます。

筆はイタチの面相筆、白だぬきも使います。(面相筆…穂が大変細く鋭く長い筆)私は、イタチは半紙に、白だぬきは作品に使います。墨・筆を説明しましたが、後は、何だと思いますか？水ですね！私は、初めは気にしていませんでしたが、墨と水は相性があります。それは、墨を作った土地に関係があります。お気付きですか？中国は硬水、日本は軟水ですね。詳しくはわかりませんが、以前、墨運堂さんが研究発表しましたので、お尋ねすれば良いかと思います。

ためしてみますと、硬水は、どんなに染みる紙も、滲みの中に輪郭が出ます。私は中国の古い墨を使っていますので、水は硬水を使っています。コンビニにも売ってます。

4．用筆法

用筆法とは言っても、私の個人的な話になります。

芝堂から学んだのは用筆法でした。用筆とは極意ですね。これは、なかなか教えてもらえないです。昔は、「良く見て盗みなさい」と言われたことがあります。言葉というのは難しいです。聞く側のとらえ方が違うからです。芝堂流は用筆により、美しい線質が生まれ、形になると思います。

芝堂流以外でも、先生達は個々に極意をお持ちであり、みなさんは知らずに使っているものだと思います。

まず大事なことは、いかに皆さんが、イメージを広げて、創造出来るかということです。頭の中のイメージを、宇宙いっぱいに広げることです。

「基本」

用筆法の上では、必ず通らなければいけないことです。簡単な事ですが、重要ですので我慢してお聞き下さい。

・筆の持ち方

みなさん、ご存じのように、単鉤法(たんこうほう)と双鉤法(そうこうほう)があります。

大体は箸の持ち方で決まりますね。(実演)

単鉤法は和様に向き、双鉤法は唐様といえます。

翠軒流は和様ですので、単鉤法(たんこうほう)の方が向いています。

「書」を書く時には、どの指が働くか、おのずと分かります。その指を筆にそえて、筆と同化させます。他の指は、その指にしたがえばよいのです。

・筆の角度

小学生には、筆をまっすぐに立てなさいと教えますが、私は少し斜(はす)に傾けます。

芝堂から、刀(とう・かたな)で紙を切るように書きなさいと言われた事があります。刀は少し傾けた方

が切れますね。たとえば、お刺身です。

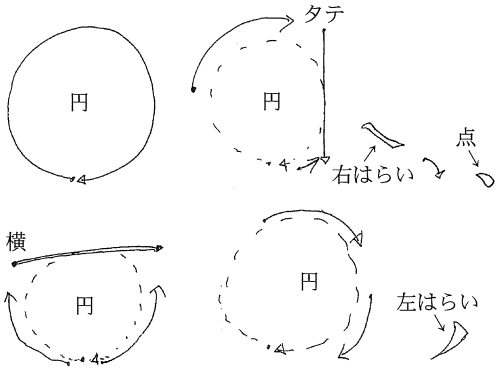
基本は中鋒の線ですので、横棒を書いた時に、筆先の命毛（穂先）が中心を通る時の筆の角度が、基本の筆の角度、「かまえ」となります。中鋒の線を引くのが特に難しいので、自然と中鋒の角度に、構えるようになるまで、練習して下さい。

・縦線と横線

横線は、肘をコンパスの針として、筆の持ち方と筆の角度を維持しますと、左から右には引く線になり、右から左には押す線になります。これが出来れば、切り返しも、楽にできます。肘を軸にしますので、線は弧を描きます。自然に孤を えがき、直線は作らないと書けない線になります、これは、重要な事で、なかなか理解してもらえません。理解したと思っても、手の方が教えたように動かないのです。それは、人間とは、楽をするように出来ているからです。横棒を引く時、肘を軸とし、腕を動かすのですが、腕を動かさず、手首を回して、書いてしまうのです。これを、しゃくると言います。しゃくるな！と、よく芝堂の声が聞こえました。しゃくると、左から右の線は、押す線になり、終筆の形は、穂先が開いて悪くなります。そして、切り返しも難しくなります。たとえば、ハケで、ペンキを塗っている様な感じです。

縦線は、肘を軸とし、手首を使いながら引きます。実際には、引くと押すが連続します。

体の骨格、関節を利用し、文字が自然に書けるようにするのです。



今までの事は、書を始めたころ、教室で芝堂の横に座りよく観察し学びました。息使い（呼吸）や、身体全部、座り方から、肩、ひじ、手首、筆の持ち方、角度、筆の運び方、穂先が生き物のように動くのを見ながら、ソックリに真似をすれば、芝堂と同じ字が書けると真剣に思っていましたから、必死に何回も、何日も、観ていました。芝堂が、半紙や条幅に文字を書いているのですが、線の軌跡はすでに過去形であり、後から見ても同じだと思いましたので、あまり観ていませんでした。ある時、父が書いた半紙の文字を、上から筆でなぞりながら、筆を運んで行くと、ピッタリあいました。うれしかったです。私の考えは、間違っていなかったと確信しました。その時の感動は今でも覚えています。

余談ですが、中学は陸上部で走ることが好きでした。日曜日も自主的に運動場を走り回ってました。足の速い先輩がいまして、その後ろにくっついてはマネをしていました。一身同化すると、言いましょうか？先輩の呼吸、腕の振りから、足のつま先まで、地面のけりも、全部マネれば、先輩のスピードまで行けると、真剣に思っていました。でも、体力とか・・・計算に入れていませんでしたね。結果は聞かないで下さい。このころから、バカでしたね。紙面上の二次元のマネより三次元のマネでしょうか？何となく理解できました。

一つ、泳ぎは理解できませんでした。ようは、苦手なんですね。芝堂は魚のように泳いでいましたけど。私は、母似なんでしょうかね？

・線とは？　点とは？

「線とは」、点と点がつながったものですね。では、点とは何でしょう？

普通は、ただの点だと誰でも思いますね。点とは、芝堂は、「宇宙だ！」とか「宇宙から点を突くんだ！」と、バカなことを言っていました。今だと、何となく分かります。何となくです・・・けど。それは、点とは広大な、精神、心、怒り、生命、魂を、穂先にこめたものかと、思います。

こんなことも言っていました。「点、すでに円である。」とか、「筆を紙に降ろす前から、すでに円が始まっているんだ。」と。解釈すると、「筆の命毛、穂先一本が紙に触れる前から、すでに宇宙の広大な円のウズが、働いている。」と、言う事だと思います。

「わかりますか？」

それらが繋がったものが

「線」

「すごいこと！・・・・ですねぇ」。

芝堂は「命を削って書いている！」とも言っていました。理解はできますけど、とてもではないけど、マネできないと思いました。そんな、大それた事を、点にこめながら、線を引き、文字を作り上げてる事を、想像して下さい。職人のような気がします。まさに職人ですね！

歯を食いしばり、腕にスジをたてながら、思いっきり握りしめた筆に対し、紙面には、時には女性の柔肌をさわるように。この言葉は誰かの引用です。時には、怒りをぶつけるようにリズムを変化させて書いていました。点と点を結ぶ、なめらかさや、そして、細かい鼓動の音が聞こえるようでした。今では貴重な記憶であり、宝です。

芝堂は、一枚の半紙、一枚の作品に、どれだけの命を使ったのでしょうか？

・感覚とイメージ

さて、ここからが本番です。

みなさん！筆を持って下さい。イメージですよ！イメージする事は、大切です。

単鉤法の方も双鉤法の方も当然いると思います。

「単鉤法の方、手を上げて下さい！」

「では双鉤法の方、手を上げて下さい！」

こんな統計を、取ったことが無いので・・ありがとうございました。

単鉤法の方は、人差し指を筆に添えるように筆と同化させます。双鉤法の方は、筆にそえている指の中の主導権を握っている指です。そうすると、指が筆になりましたね。これは、筆を持っていない時でも有効です。どんな時でも「書」がイメージ（頭の中）しながら、指で書けるからです。

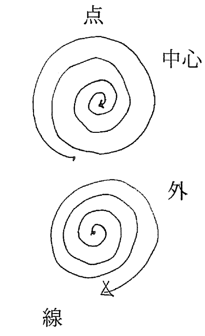
芝堂もよく指が動いていました。こんな風に。

（実演）

では、筆（人差し指）を紙（机）に降ろします。実際に、筆の毛が紙に触った感覚が分からないといけません。家に帰りましたら、忘れないうちに、試してみて下さい。（実演しながら）

筆を持ちます。人差し指の神経を、穂先の毛一本まで降ろします。そうすると、筆の毛が紙に触るとき、むずがゆくなります。毛の触った位置と、人差し指の同じ位置に感触を感じる様になれば良いです。書いている時、紙に、筆の毛がどこに触って、触っている面が変わっていくのが、感覚で分かるまで、イメージする練習をして下さい。そうすれば、外でも、イメージの中で、指で文字が書けるようになります。

もう一つ、これも大事な事ですが、命毛、穂先一本を船頭にすれば、他の全ての毛が従いますので、穂先一本に神経を集中し、その一本から紙に降ろすのです。



・「丸」を書いてみます。

下から書きます。

今までの基本を思い出して。

（もう一度基本の説明をする。筆の持ち方、角度）

大体、人差し指のツメの右端を、引っかける様にして、「丸」を書いていきます。

後半ぐらいから触る位置が変わり、指の腹に移動していきませんか？筆がねじれながら、指の腹の方へ移動していきませんか？イメージできましたか？先人の書家はすべて下から書いています。なぜでしょうか？

他にも意味があると思いますが、下から書く「丸」には、用筆のすべてが、含まれていると思います。

先ほども言いましたけど、筆の命毛、穂先一本が、紙に触れる時、すでに宇宙の広大な円の渦が働いていると言いましたね。これに付け加えますと、下から始まる右回りの円の渦となります。

余談ですが、では右回りがあるなら、左回りもあるのではないかと、ふと思いますね。実はあるんです。これも芝堂に教わりましたが、右回りの円は渦のように、中心に向かって行きます。左回りの円は、外に広がり、膨らんでいきます。これらをどこに応用できるか、後で説明します。

「ボードにより説明」

・丸・点・横・縦

・左払い・右払い

これらを、つなぎ合わせて、文字を作ります。

・切り替えし

・「かな」の練習より

翠軒流はご存じのようにかなも書きます。

かな準備運動よりヒント

（かなの先生に聞いてみる）

翠軒流の作品は、おもに草書作品ですので、かなに近いと思います。右回り、左回り、ジグザグ（切り替えし）の練習において

（実演）

右回りから左回りの移り変わり。その逆も。

無限大∞の切り替えしの練習はあるのでしょうか？

無限大の切り返しは、自然に高さを作り出す。

これで、一つの文字が生まれると思います。生むということが、どれだけ大変な事か、お分かりになれば、幸いです。

最後に、もう一つ、お話しします。

・条幅の作品

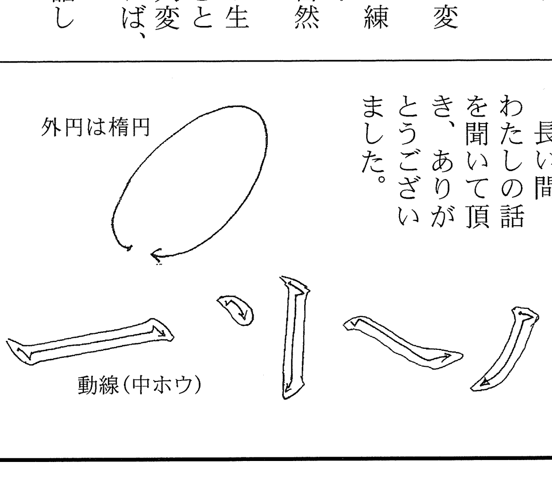
多くの字数があっても、最後まで気持ちを繋げる事が大切です。

頭の中を宇宙一杯にし、時間を高速に回転させれば速く書いても筆の動きがスローに見えてきます。そうすれば、こうやってやろう、ああやってやろうと、作品の中にもりこめます。

こんなこと、経験された方いますか？簡単にはいきませんが、何枚も書けば到達できると思います。

今までの、お話は、あくまでも用筆であり、古典をしっかり臨書することも忘れてはいけません。

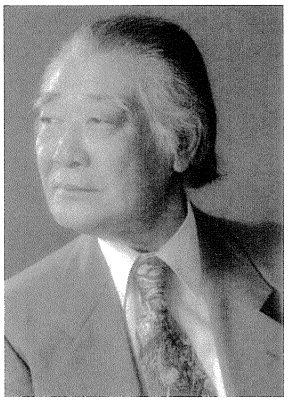
長い間、わたしの話を聞いて頂き、ありがとうございました。

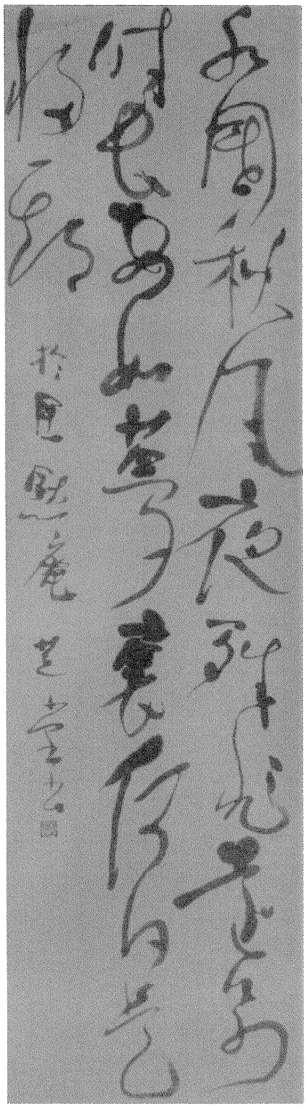


松下英風先生に草稿をお借りし掲載させていただきました。淡墨の書をめざす者にとっての参考書、座右に置いて精進しましょう。

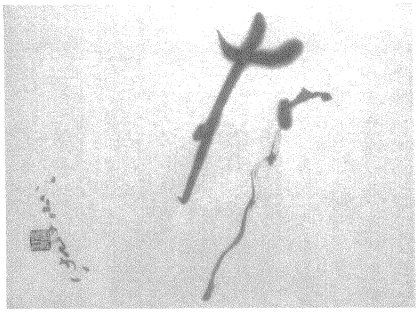
松下芝堂書作展

会期　平成二十八年三月十二日(土)～十七日(木)
　　午前十時～午後五時
会場　津島市文化会館　研修室
主催　津島市教育委員会

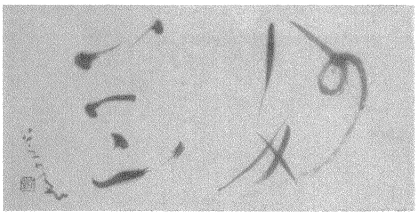




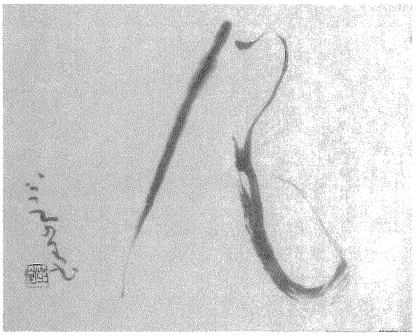
陸游詩　2×6



愛　半切1/3

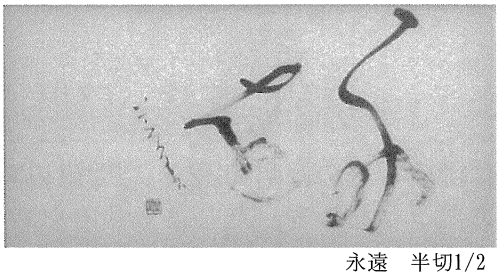


妙道　半切1/2

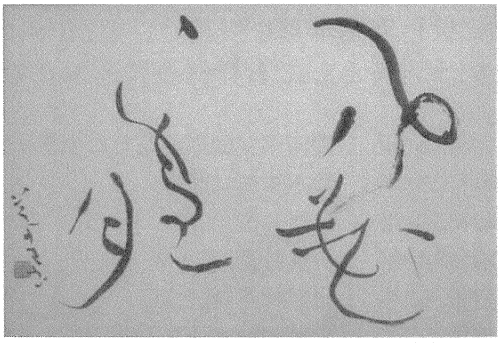


風　半切1/3

円転自在　半切1/2



永遠　半切1/2



風花雪月　全紙1/3

有根会初代会長、松下芝堂先生が逝去されて、早や七年が過ぎようとしています。居住地である津島市へ作品を寄贈されたところ、津島市より皆様にご披露させてほしいとのことで、津島市教育委員会主催「松下芝堂書作展」が開催されました。今年は松下芝堂生誕九十年にもあたり、亡くなって初めての展覧会となり若い頃から晩年までの大小作品二十八点が展示されました。国会議員の先生、津島市長様、教育長様、中部日本書道会の役員の先生方、翠門の諸先生、その他大勢の皆様に、芝堂芸術の一端をご覧いただき、当時を偲び供養にもなり、大変嬉しく有難い展覧会となり、好評のうちに幕を閉じました。

平成二十八年度事業計画

◇四月二十九日(祝・金)
　総会・作品研究会　豊川稲荷
◇平成二十九年
　一月十七日(火)～二十二日(日)
　第四十七回有根会書展
　第三十三回有根会公募展
　第四回有根会書初め公募展
　愛知県美術館八階(D室)
◇一月二十一日(土)
　書初め公募展表彰式　十時半
　県美術館十二階アートスペースA
◇一月二十二日(日)
　有根会書展・有根会公募展
　　表彰式及び懇話会
　マリオットアソシアホテル
◇研修旅行　企画中
　にぎり墨体験(奈良)

ホームページ随時更新中
≪書道研究　有根会≫
どうぞご覧ください

編集後記

第５号は、初代会長生誕九十年松下芝堂書作展の様子、現会長松下英風先生の「和様・淡墨の書」ご講演等、内容も充実した見応えのある会報となりました。

玉稿をお寄せいただいた先生方にお礼申し上げます。

編集委員　永谷恵子　大野昭子　加藤翠林　小林雅子　山田千鶴